

## 子育て支援としての相談活動のあり方

——保育所・幼稚園の保育者を対象にした質問紙調査から——

学校教育専攻  
教育臨床コース  
中 津 郁 子

指導教官 山下 一夫

### 1 問題と目的

保育所や幼稚園で子育て支援活動が取り組まれるようになってきている。子育て支援は親の置かれている状況を、幅広い観点から把握することから始まる。また、何を支援するかは、個々によって異なるが、親自身の力をエンパワーすることである。そのことは、従来の保育の考え方から、発想の転換や研修の必要が求められていることでもある。しかも、予防的な意味を考えると、地域に密着した保育所や幼稚園で子育て支援が行われることが望ましい。しかし、子育て支援に関する研究では、支援される側（親や子ども）が多く、支援活動を担っている保育者を対象としたものは少ない。そこで、保育者の側から子育て支援を考えるため、主として保育の中での相談活動に視点をあて、検討し考察することを目的とする。

### 2 方法

#### (1) 調査対象

徳島県の保育所・幼稚園の保育者を中心に 279 人に質問紙調査を行った。246 人から回答があった。回収率は 88.2%。

#### (2) 調査項目

保育所・幼稚園での子育て支援の活動内容や必要性に関すること、保育の中で行われている相談活動に関すること、実際に保育の中での対応の仕方を聞いたものなど 14 項目である。

### 3 結果

#### (1) 子育て支援の必要性に関して

調査した保育所・幼稚園ではなんらかの形で子育て支援活動が行われていた。子育て支援活動のための教育課程・指導計画の見直しは約半数ができていなかった。必要性の項目では、回答者が最も多く認めていたのは、「育児で悩んでいる親たちにとって必要」だった。次いで、「子育ての楽しさを伝えていくために必要」であった。また、必要性を肯定的にとらえる 6 項目のいずれも「思う」が 70%以上で、必要性を高く認めていた。「通常の保育の中で出来ることをすればいい」と回答した人は 75%であり、「多少負担に感じることもある」が 63%で、負担感や不安、戸惑いも見られた。保育所と幼稚園のクロス分析では、保育所の方に有意に必要感が高く、「何をすればいいかわからない」と思うのも保育所に多かった。年齢別のクロスでは、「親たちを甘やかし、育児力を低下させることになりはしないかと危惧」に「思わない」とする人が 20 歳代に多かった。また、「通常の保育に支障をきたすのではないか」と思う人が 40 歳代に多く、「何をすればいいかわからない」と思うのは 20 歳代に多かった。経験年数でもほぼ同様だった。支援活動で「地域の人たちとの触れ合い」と「園庭や施設の開放」に取り組んでいる人は、「通常の保育に支障をきたす」とは「思わない」人がいずれも有意に多く見られていた (62%, 71%)。

#### (2) 相談員の必要や資質としての相談能力

専門の相談員が必要かどうかを聞いたものでは、74%が「必要」としていた。保育者の資質として相談能力が期待されているが、それに関しては、「身につける努力をしている」と「研修や勉強の時間がない」とする人が45%前後で、ほぼ同じであった。「努力している」と回答していたのは、幼稚園の保育者、50歳代の人に有意に多かった。

### (3) 保育行動としての相談活動について

保育の営みの中で、保護者と「ちょっとした会話」があるかどうかを聞いたところ、「ほとんど毎日している」と回答した人が58%見られた。連絡帳や手紙・電話などでの連絡は、「必要な時はしている」という人が69%いた。「20分以上の会話」については、「必要な時はしている」人が75%だった。保育所の人の方に「ちょっとした会話」や「連絡・伝達」も「毎日・定期的に」しているという人が多かった。

### (4) 保護者への対応について

A子・B子とその母親を想定して、感情と対応に分けて聞いた。A子は保育の中でよく見られる親子で、ほとんどの保育者は、「何かあるのかな」と思って、半数以上が「雑談を交えつつ家庭の様子を聞く」と回答していた。B子は、支援活動が始まってから保育者が悩む母親像として、一見ストレス発散をしていると思われる母親を想定した。「B子を預けて、気楽そうにテニスをしている。迎えが遅いこともある」というその母親に関しては、保育者の思いが分かれた。「何かあるのかな」と思う人が22%になり、「悲しくなる」「腹が立つ」「仕方がないな」と思うようだ。感情に関しては自由記述等から、保育者は母性神話的な発想をしていることがうかがえていた。対応に関しても34%の人が「B子様子を伝えて会話する」と回答しており、暗

に母親を指導・叱責する意図も感じられる。B子の母親に対して、「何かあるのかな」と回答しているのは、幼稚園の保育者、40歳代、50歳代の人に有意に多かった。

### (5) 必要性の認識度による違い

子育て支援の必要性の個人得点を求め、高群と低群に分け、比較検討した。相談能力に関して、「努力している」とする人、保育の中で「ちょっとした会話」を「毎日・定期的に」している人が高群に有意に多かった。B子の母親への対応では、「雑談を交えつつ家庭の様子を聞く」と回答した人も高群に多かった。必要性を強く認識している人の方が、相談能力を身につけ、保育行動でより臨床的な取り組みが出来そうだった。

## 4 考察

調査結果から、保育所・幼稚園の子育て支援活動や相談活動を行うにあたって、まず、子育て支援に関する十分な理解と職員間での話し合いが必要であることが再認識された。そして、毎日の保育の中でのちょっとした会話を大切に、そこから保護者の実情を把握する姿勢が今後も望まれる。

保護者との相談にあたるためには、調査結果から、40歳以上の方がより臨床的なかわりができるため、重点的に相談技術の研修を継続的に実施することが望まれる。そして保護者の相談を受ける役割、保育者と保護者を繋ぐ役割、保育者の相談機能を高めサポートする役割等として、専門の相談員の配置が望まれる。また、保育者は母性神話、3歳児神話などに囚われている傾向もうかがえていた。保育者の意識改革が必要であるが、今後の課題として検討していきたい。また、専門の相談員の利点や注意点なども事例に即して今後検討していきたい。